

ジッド作品における登場人物たちの日記：「物」としての日記について

小坂, 美樹
大谷大学：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/1794500>

出版情報：Stella. 35, pp.315-326, 2016-12-19. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



ジッド作品における登場人物たちの日記

——「物」としての日記について——

小 坂 美 樹

はじめに

アンドレ・ジッドの作品で多用される、登場人物による1人称の「語り」について、ジャン＝イヴ・タディエは次のように簡潔に述べている——

たしかに、アンドレ・ジッドの小説の大半は1人称で語られる。けれども、もっとも長く、また人によってはもっとも重要とされている2作品『法王庁の抜け穴』と『贗金つかいたち』は違う。ただし『贗金つかいたち』では私的な日記（journal intime）が使われ、3人称による語りの印象をやわらげている。（この私的な日記の形式は『パリュード』『狭き門』『田園交響楽』『女の学校』でも使われており、これほどの執拗さは他の小説家においては例を見ないであろう。そしてジッド自身の署名による膨大な『日記』がなければ、この形式はもっと人を驚かせるだろう。）¹⁾

このようにジッドは、1人称の語りのなかでもとりわけ登場人物たちの日記による語りを好んで採用した。ジッド作品のうち登場人物たちの日記が作品全体もしくは一部に用いられているものを発表順に並べると以下のようになる²⁾ ——

- 『アンドレ・ワルテルの手記』（1891）
- 『パリュード』（1895）
- 『狭き門』（1909、アリサの日記）
- 『法王庁の抜け穴』（1914、ラフカディオの日記）
- 『田園交響楽』（1919）
- 『贗金つかいたち』（1926、エドゥアールの日記）
- 『女の学校』（1929）

日記形式の語りは、ジッドのオリジナルでもなければ、ジッドの時代にはも

はや斬新なものでもなかった。にもかかわらず、彼は文学生活の最初から長きにわたってこの形式を使い続けた。フランス文学史においても、最も頻繁に日記形式を用いた作家のひとりと言えるであろう³⁾。この形式に対するジッドの偏愛ぶりは、彼自身の長大な日記であろうとなかろうと十分に注目に値する。

物語において登場人物たちが書く日記は、言うまでもなく、現実にある日記を模倣している。しかしながら、1人称小説を「形式上のミメシス」とするグローヴィンスキが示したように、それは単純な模倣ではない。「日記の構造をいかにフィクションとするか」⁴⁾が問題なのである。

本論では、フィクションとしての日記を考えるにあたって、登場人物たちが自らの日記に書き込む、一見すると何でもないが、しかし物語において重要な意味をもつと思われる単語に着目したい。それは、*cahier* や *carnet* といった、日記の「物」としての側面を表す言葉である。日記の書き手である登場人物たちは、自分の内面を書きつける「ノート *cahier*」あるいは「手帳 *carnet*」について言及することがある。例えば『法王庁の抜け穴』のラフカディオは日記を次のように始める――

デュイノ。86年7月10日。今朝、ファビアン卿が僕たちのもとにやってきた。彼は僕にカヌーを1艘、カービン銃を1丁、そしてこのきれいな手帳をくれた。[CV, RRI, 1029]

また『狭き門』のアリサは日記を始めた数日後、「もう私はこのノートにこだわってしまっている。[...] このノートは幸せを再び手にする助けとしなければならない」[PE, RRI, 893]と記している。

日記を書いていると、そこに日記帳があるのは明らかなのだが、他作品においても書き手たちは「このノート」の語を繰り返す。もちろん日記体小説における唯一の共通テーマが「日記を書くこと」なのだから⁵⁾、「私は日記を書いている」といった表現が作中に散見することに不思議はない。しかしジッド作品における日記の書き手たちは、自分の日記を *journal* と言わぬわけではないが、彼らがよりしばしば用いるのは *cahier* や *carnet* の語である。*journal* の語はたしかに「日記帳」という物を表すこともできるが、同時にその内容も指しうるので、*cahier* や *carnet* の語と比べると抽象度が高い。日記を形あるものと

して提示するのは、やはり cahier や carnet といった極めて即物的な語でなければならない。なるほど書き手たちの日記帳は物語のなかにしか存在しない。だが、ce cahier あるいは ce carnet と呼ぶことで、「物」としての存在感が、指示詞 ce ともあいまって、具体的な形で立ち現れてくるのである。

ジッド作品における日記形式の重要性をいち早く指摘したリーランド・チェンバースが示すように、日記が「物」としてあることによって、登場人物たちのさまざまな行動が可能になるのだ⁶⁾。「物」として提示される日記は、物語においてどのように機能するのか、そしてジッドが cahier や carnet といった語をどのように使ったのか、それを検討するのが本論の目的である。

「物」としての日記

小説において語りの形式がどのようなものであろうと、語り手の声はすべて、我々小説の読者のもとには書物として印刷された活字の羅列として届く。それに対し、物語内部での「語り」は多様な形をとりうる。登場人物が主に自分のことを1人称で語る場合にかぎっても、それが語り手の口頭での告白であるならば、その言葉は物語のなかでは語られたそばから消えてゆく。一方、語りが日記による場合、語り手の言葉は物語のなかの日記帳に文字として定着する。同様に書簡体小説や回想録形式の小説でも、語り手の言葉は文字として残りはする。ただし、書簡に記録された語り手の言葉は、基本的には相手のもとに残るため、自分の書いた手紙をいつでも読み返せるわけではない。また回想録の場合も、語る私と語られる私の時間的隔たりは大きく、語り手の過去の出来事への評価はすでに定まっている。

こうした隣接ジャンルとの比較が示すように、物語における日記の書き手たちのもとには、自分の過去の記述が日々の断片として蓄積されてゆく。その媒体となるのが日記帳としての「ノート」および「手帳」であり、こうした日記帳のありかたによって、書簡や回想録とは異なる、日記の書き手に特有の行動がうまれる。まずは、日記の書き手が自分の書いたものを読み返すことについて検討しよう。

《読み返すこと》

日記は、自分が自分について自分のために書くという閉じた性質をもつ「聞

き手不在」⁷⁾の形式である。しかし、それは日記が誰にも読まれれないというのではない。むしろ日記形式の小説においては、日記の書き手本人が自分の記述を読み返すことには重要な意味がある。

日記では、書く「私」も書かれる「私」も常に移動しながら進み、日記の記述はその日その日の断片として記録されてゆく。日々の断片を重ねれば、当然そこには変化や矛盾が見られる。書き手は日記を読み返すことで、過去の自分と現在の自分を比較し、自らの変化や矛盾に気づき、現在の自分を確立してゆく。バラバラの自己を統一するためには、日記を読み返す行為が欠かせないのである。

読み返し例として、『田園交響楽』と『女の学校』を挙げよう。まずは『田園交響楽』の牧師の日記、第2部（第2のノート）の冒頭。牧師は、「しばらくこのノートを打ち捨てておかなければならなかった。[…]昨夜、これまで書いたところをすべて読み返した」と書き、今になってみると、なぜ以前の自分がジェルトリュードとの関係についていろいろと思い迷っていたのか「ほとんど理解できない」と記す[SP, RR2, 36]。「しばらく打ち捨てる」とあるが、物語では約1カ月半のことであり、時間的な隔たりはさほど大きくない。しかし牧師は、少し前の記述を読み返すことで、過去の自分と現在の自分との違いに気づき、現在の自分の感情、すなわちジェルトリュードへの愛がどのような性質のものなのかをはっきりと意識するのである。

『女の学校』エヴリーヌの日記においても読み返しが行われる。娘時代のエヴリーヌは、婚約者ロベールへの愛と尊敬に満たされた幸福な日々を日記に書き綴る。しかし20年後、そのロベールと結婚し2児の母となった彼女は、夫の偽善的な振る舞いに耐えがたい思いを抱いている。息子の療養に付き添うため家をしばらく離れたとき、彼女は若き日の日記帳を取り出す。エヴリーヌの日記第2部の冒頭は、「療養中の退屈を紛らわすために刺繍道具を持参するように、私はこのノートを持ってきた」[EF, RR2, 613]と始まる。続いて、その翌日の記述――

変わったのは彼 [=ロベール] ではない、私なのだ。私の下す判断なのだ。[…] この変化を理解するために、20年前にこのノートに書いたことを読み返した。無邪気で信じやすく、少し世間知らずなお嬢さんが自分だとは、とうてい認められない！ [ibid., 615]

牧師は1カ月半、エヴリーヌは20年と年月の隔たりは異なるものの、両者とも、過去の記述を読み返すことで自分の変化を自覚する。こうした読み返しは他作品でも行われ、登場人物たちは過去の自分の上に現在の自分を重ねながら、人物としての一貫性を獲得してゆくのである。

過去の自分の言葉がノートという形で手元に残されているからこそ、読み返すことが可能となり、書き手の内面の変化を自然な形で表現することができる。cahier という至極当然の語を使用し、登場人物の言葉がそのまま記録・蓄積されてゆく形態を提示することには意味があるのだ。しかも「物」としての日記は、登場人物の自己確立という内面の活動を促すだけではない。それはまた登場人物の外部にも作用することがある。

《読まれること》

日記はノートという形を取るがゆえに時間を越えて残る。形あるものは、さらに空間も越えることができる。そのため、ジッド作品における登場人物たちの日記はしばしば他の登場人物へと渡る。本来、他者を拒否するはずの日記が、他者を読み手として呼び込んでしまうのだ。

人に読ませるつもりはなくても、日記が自分以外の誰かに読まれるかもしれないと考えるのは、さほど不自然なことではなかろう。じっさい『田園交響楽』の牧師の日記には、読まれる可能性についての言及がある。しかも読み手として想定されるのは妻アメリーと具体的である。ところが、こうした言及にもかかわらず、牧師の日記が他者に読まれることはない。しかしこれはむしろ例外であって、先に列挙したジッド作品における7つの日記のうち、実に5つが書き手以外の登場人物によって読まれるのである。

日記が読まれることについて、フランス文学における日記体小説を体系的にまとめたヴァレリー・ラウルが、その根本的な理由を示している――

日記が具体的な物 (a concrete object) として存在し、他者に理解可能な言語で書かれている（「私たち」が読むための条件）ということは、日記が常に自分との対話といった自己中心主義から抜け出る可能性があることを意味する。⁸⁾

読まれるといっても、それが書き手によって指定された相手に読まれる場合と、書き手の意思とは無関係に、日記が他者に盗み読まれてしまう場合がある。

はじめに、日記の宛先を書き手自身が指定するアンドレ・ワルテル、アリサ、エヴリーヌの場合を順に見ていこう。3者はいずれも物語のなかで死んでしまうが、彼らが日記を他者へ開く決意をするのは、まさに自分の死を意識したときである。

まず、ワルテルは自身の死あるいは狂気が迫っているのを感じ、執筆中の小説『アラン』の完成を急ぎつつ、日記に「おお、何かを残すこと——完全には死なないこと。『アラン』が完成しないか、あるいは私がいかに早く狂気に陥る場合、その時には私のノートがある」と記し、さらに大文字で「ピエール・C★★★にこれらのノートを託す。もし私が発狂したら、これらのノートを出版してほしい」と遺言する [CAW, RRI, 102]。遺言部分を含めたその日の記述には、「mon cahier», «ces cahiers», «un cahier blanc, un cahier noir», «mes cahiers」と5度にもわたって、「cahier」の語が繰り返され、日記がまさに「具体的な物」として示される。そして遺言どおり、ワルテルの2冊の日記帳はピエールに託される。

『狭き門』でもまた、アリサの日記は彼女の遺言によりジェロームへと渡る設定になっている。ジェロームは回想の最後にアリサの死を語り、彼女の日記が自分のもとに届いたことを報告する——

公証人から届いた封印された封筒には、アリサの日記が入っていた。私はここに、その多くのページを書き写す。注釈はつけない。私がそれを読みながら胸に抱いた様々な思いと、とても言葉にはならない心の動揺については、これを読む方々が十分に想像くださることと思う。[PE, RRI, 890]

ジェロームは、ここでは cahier や carnet といった語ではなく、「日記 le journal」の語を用いている。物語では、ジェロームに届いたアリサの日記帳は2冊あることになっているので、ここでは「日記」とひとまとめにされているが、「多くのページ」といった語からノートとしての物質性は十分に伝わり、続くアリサの日記が自然なかたちで導入される。

そして『女の学校』のエヴリーヌも、最後に娘ジュヌヴィエーヴを日記の宛先として、「もし私が戻ってこれなければ、彼女にこのノートを託す」[EF, RR2, 643]と明記する。

ワルテル、アリサ、エヴリーヌの3人は、自分のためだけに書いてきた日記

を、死を前にして他者にゆだねる。さらには、日記を託されたピエール、ジェローム、ジュヌヴィエーヴの皆が一様に死者の日記を公開する。日記の出版を望んだのはワルテルのみであったので、書き手の意思が必ずしも尊重されたとは言えないが、書き手の日記は少なくとも、相手に何らかの行動を促すきっかけとなった。閉じられた形式である日記が手紙のように宛先を持つのだが、その前提が書き手の死である限り、結局、書き手と読み手の関係が変わることはない。

日記による登場人物たちの関係の変化という点から見れば、むしろ書き手の意思に反して盗み読まれる日記のほうが興味深い。『法王庁の抜け穴』のラフカディオの日記と、『贗金つかいたち』のエドゥアールの日記が、それぞれ盗み読まれ、いずれの場合もこうした慎みを欠いた行動により、日記を読んだ人物と日記の書き手が直接に対面することになる。

『法王庁の抜け穴』では、ラフカディオの日記は鍵付きの引き出しに収められていたが、鍵が鍵穴にささったままであったため、異母兄ジュリウスに無断で読まれてしまう。また『贗金つかいたち』のエドゥアールは、日記を入れた旅行鞆を手荷物預所に預けたのはよいが、その預り証を落としてしまう。それを拾ったのが主要人物のひとりベルナール。ベルナールは勝手にエドゥアールの鞆を引き取り、鍵がかかっていないのを幸いと、中にあった日記を読み、エドゥアールに会いに行く。

たしかに、ジュリウスがラフカディオの日記を理解できなかったのに対して、ベルナールがエドゥアールの日記から得たものは大きかった。情報という点でも、それに伴う登場人物たちの感受性という点でも両者は異なるが、鍵がかかるのにかけていないといった設定、日記の盗み読みによって書き手と読み手が近づくといった状況は類似している。まさに日記が重要な道具として登場人物の行動に影響を与えているのが分かる。

《日記の破棄》

日記が「物」であることによって可能となる登場人物たちの行動が、さまざまな形で物語を動かしていることを見てきた。日記を自分のもとにとどめ、読み返し、自己を統一してゆくこと。自分の死に際して日記を他者へと開くこと。意図せずして他者に読まれてしまうこと。そしてもうひとつ、強いインパクト

を持つ日記の扱い方がある。日記はノートという形で残るものとして提示されるが、物語においてその形が常に保証されているわけではない。日記帳は時に書き手によって破られ、そして燃やされるのだ。もちろん、登場人物 7 人すべての日記の全体または一部が破壊されるわけではなく、その破壊の度合いも一様ではないが、いくつかの共通要素を抽出することができる。『アンドレ・ワルテルの手記』『狭き門』『女の学校』の順に検討しよう。

まずワルテルの日記には、日記の内容を補足するため、欄外にいくつかの注が入る。これらが日記の出版を託されたワルテルの友人ピエールの手によることは、日記の後半（黒いノート）冒頭部に付された注のひとつに、P. C. と署名があることで分かる仕掛けになっている。そうした注のなかに 2 カ所、「引用削除」「本文削除」[CAW, *RRI*, 10 ; 74] と日記の一部がワルテルによって削除されたことを示すものがある。ただしこの場合、ワルテルによる元の文が判読不可能なほど消されていたのか、それともピエールの判断で元の文が示されなかったのかは分からない。

ワルテルの日記にピエールが介入したように、日記の文章の削除について、書き手とは別の登場人物が介入する例は『狭き門』にも見られる。同作の語り手ジェロームは、アリサの日記を「注釈なしで」[*PE*, *RRI*, 890] 書き写すと述べている。だが実際には、アリサの日記のところどころに彼の声は侵入してくる。たとえば、ジェロームがアリサの日記の破棄された部分について言及する箇所がある。アリサの日記の記述の合間にジェロームは、「続く何ページもが破り取られていた」[*ibid.*, 894] と報告し、破り取られた部分に何が書いてあったのかを推測する。ジェロームの推測がほぼ正しいことは、ジェロームの回想に引用されたアリサの手紙などからもうかがえるが、具体的な内容は不明のままである。もう 1 カ所、ジェロームは同じように、「ここで日記の 1 冊目のノートは終わっている。続くノートは破棄されたと思われる」[*ibid.*, 901] と述べるのだが、丸ごと捨てられたノートに何が書かれていたのかについては推測すらない。

アリサの日記も、先に見たワルテルの日記も、破棄についての言及が他者によって行われる場合、当然のことながら、破棄された理由も、その内容も明確ではない。さらには、その介入が正当なものであったのかといった疑問さえも生じよう。しかしアリサの日記では、彼女自身がその一部を破棄したことを明

らかにしている――

6週間以上このノートを開かなかった。先月、何ページかを読み返し、そこに「うまく書こう」という馬鹿げた、罪深い気遣いが見られたからだ……それは彼〔＝ジェローム〕のせいだ……〔…〕

「うまく書けている」と思うページをすべて破り捨てた。（どういう意味かは分かっている。）彼のことを書いたところはすべて破り捨てるべきだった。何もかも破り捨てるべきだった……でも、できなかった。[*ibid.*, 898]

上の引用が示すように、日記の破棄のきっかけは再読である。再読すなわち読み返しが、先述のような自己統一を促すといった役割を果たすのではなく、ここでは、過去の自分を受け入れられないアリサの心の迷いが強く表現されている。そして、死の数日前のアリサの日記――

日記を捨ててしまう前に読み返した。〔…〕

この日記を火に投げ込もうとしたとき、予感めいたものがして手が止まった。これはもう私のものではないのかもしれない、これをジェロームから奪ってはいけないのかもしれない、ずっと彼のためだけに書いてきたのかもしれない。[*ibid.*, 905]

こうしてアリサは日記をジェロームに送る決心をする。アリサに見られた日記の再読と、破棄あるいは破棄の断念は、同じく女性の書き手であるエヴリーヌとも共通している。

エヴリーヌの日記前半（第1部）には婚約時代の幸福が、20年後の後半（第2部）では結婚生活の孤独が描かれる。正反対の内容ではあるものの、日記を読み返して破り捨てたくなる、けれどもやはり残しておくといった書き手の態度は第1部でも第2部でも変わらない。

ワルテル、アリサ、エヴリーヌの3者とも日記の破棄を実行する、あるいは破棄について語っている。そして彼らはいずれも死を前にして日記を他者に託し、物語最後に死を迎える。一方、『パリュード』の語り手、『田園交響楽』の牧師、『贖金つかいたち』のエドゥアールは、物語のなかで死ぬことはなく、また日記の破棄について語ることもない。さらに彼らは、日記を他者に見られることはあっても、見せるようなことはしない。

日記の破棄と譲渡という、一見矛盾する行為が重なっていることは興味深い。日記は前提として他者に対し閉じられている。ゆえに日記の破棄は書き手のみ

の判断で行われるはずであるが、日記を破棄した書き手たちが皆そろって日記を他者にゆだねることを考えれば、その破棄の判断には、自分の書いたものに対する他者からの批判とは言えないまでも、他者の視線が意識されているのではないか。つまり日記を破り捨てる行為は、書き手が日記を他者へ託す決心をする前からすでに書き手のなかにある、日記を特定の相手に読ませるという無意識の反映と解釈できるかもしれない。

もちろん例外もある。『法王庁の抜け穴』のラフカディオは死ぬことも日記を他者に渡すこともない。しかしながら彼による日記の破棄が最も徹底している。彼は自分の「美しい手帳」を丸ごと燃やすのだ。ジュリウスに勝手に部屋に入られ日記を読まれたことは、ラフカディオに強い怒りの感情を巻き起こした。ジュリウスが帰った後、ラフカディオは日記のみならず、母親と写っている写真も見られたことに気づく。その写真をびりびりに破ったラフカディオは、次のような行動に出る――

彼〔＝ラフカディオ〕は、写真のかげらに火をつけようとしたが、うまくいかない。そこで、暖炉のなかに置いてあったいくつかの袋をのけ、炉のなかに、薪載せ台のように、持っていたたった2冊の本をおき、手帳を破り、引き裂き、くしゃくしゃに丸めた。その上に写真を投げ込み、すべてに火をつけた。[CV, RRI, 1033]

ラフカディオには、日記を破棄する前の再読も破棄への迷いもない。日記を残して死ぬのではなく、母親の写真と日記という過去に自ら火をつけて清算することで彼の冒険が始まるのである。

おわりに

ジッド作品における登場人物たちの日記について、その「物」としての側面に着目し検討した結果、我々は、虚構の日記が *cahier* や *carnet* の語で提示され、書き手の言葉を蓄積して残すノートの形をもつ、その事実こそが登場人物たちのさまざまな行動を導くうえで重要なことを確認した。

最後に、*cahier* と *carnet* の語の使い分けについて述べておきたい。アリサやエドゥアールのように、同じ日記帳を時に *cahier*、時に *carnet* と呼ぶ例はあるが、全体としては *cahier* の語の使用が圧倒的に多い。これとは対照的に、ジッド自身は己の日記帳のことを *cahier*, *carnet*, *journal* の呼称のなかでも

carnet を最も好んで用いている。さらに彼の日記には、carnet の大きさや表紙の色についての記述があり、そうした日記帳の形状が日記の内容にも影響することが記されている⁹⁾。一方、彼の登場人物たちが cahier / carnet の形状を記述することは希であり、必然的に日記帳の形状と日記の内容とのつながりが描かれることはない。こうした用語の使用方法の違いが示すのは、作品に日記がよく用いられるからといって、それが必ずしも作者の習慣を単純に登場人物に反映したものではないということだ。ジッドはフィクションとしての日記を「物」として示し、物語における日記のさまざまな可能性を開拓・展開したのである。

註

- 1) Jean-Yves TADIÉ, *Le Roman au XX^e siècle*, Paris : Pierre Belfond, 1990, p. 15.
- 2) ジッド作品からの引用は以下の版を用いる—— André GIDE, *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, vol. I (abrégé ensuite : RR1). Édition publiée sous la direction de Pierre MASSON, avec, pour ce volume, la collaboration de Jean CLAUDE, Alain GOULET, David H. WALKER et Jean-Michel WITTMANN, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2009. *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, vol. II (abrégé ensuite : RR2). Édition publiée sous la direction de Pierre MASSON, avec, pour ce volume, la collaboration de Jean CLAUDE, Céline DHÉRIN, Alain GOULET et David H. WALKER, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2009. 『アンドレ・ワルテルの手記』(略号 CAW, 以下同様), 『パリュード』(P), 『狭き門』(PE), 『法王庁の抜け穴』(CV) は RR1 に, 『田園交響楽』(SP), 『贗金つかいたち』(FM), 『女の学校』(EF) は RR2 に収録されている。本文中では引用末尾に作品の略号と巻数および頁数を示す。引用の日本語訳は既存訳を参考にしたうえでの拙訳である。
- 3) フランス文学における日記体小説について参照した文献は以下のとおり(出版年順)—— Valerie RAOUL, *The French Fictional Journal : Fictional Narcissism / Narcissistic Fiction*, Toronto / Buffalo / London : University of Toronto Press, 1980 ; H. Porter ABBOTT, *Diary Fiction : Writing as action*, Ithaca / London : Cornell University Press, 1984 ; Lorna MARTENS, *The Diary Novel*, Cambridge : Cambridge University Press, 1985 ; Yasusuke OURA, «Étude sur le roman journal français», *Études de langue et littérature françaises*, n° 52, mars 1988 ; Trevor FIELD, *Form and Function in the Diary Novel*, Totowa : Barnes & Noble Books, 1989.

- 4) Michał GLOWIŃSKI, «Sur le roman à la première personne», *Poétique*, n° 72, novembre 1987, p. 500.
- 5) Gerald PRINCE, «The Diary Novel : Notes for the definition of a sub-genre», *Neophilologus*, vol. 59, October 1975, p. 479.
- 6) Leland H. CHAMBERS, «Gide's Fictional Journals», *Criticism*, vol. 10, 1968, p. 310.
- 7) OURA, *art. cité*, p. 103. 原文では «l'absence de destinataire» で、日記体小説の特徴のひとつ。
- 8) RAOUL, *op. cit.*, p. 43.
- 9) Cf. Anton ALBLAS, «Gide devant son cahier : la pratique», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 142, avril 2004, pp. 207-226.